



各都道府県が
取り組む
教育改革

佐賀県

地域とともに 特色ある教育を 考えていく

生徒の高校に対するニーズや学力、価値観が多様化する中、生徒を受けとめる高校自身も変革が求められている。しかし、その変革の方向性を見定めることは簡単ではない。各高校が地域社会に根差したものである以上、高校のあるべき姿、将来像は地域とともに模索するものなかもしれない。佐賀県では、すべての県立普通科高校で学外の人々と教育内容を検討していくシステムを確立した。改革の背景、その現状を佐賀県教育庁学校教育課に伺った。

学外の声を 学校作りにも反映

多様化した生徒のニーズに対して、果たして学校はふさわしい教育内容を備えているのだろうか？ 各学校の実態に合った指導方法、行事の選定がなされているだろうか？ このような視点で学校を見直す取り組みに佐賀県では比較的早い時期から着手してきた。平成5年度から実施されていたのが「学

校活性化推進事業」、そしてそれを引き継ぎ、発展させた形で8年度より始めたのが「特色ある普通科高校づくり推進事業」だ。佐賀県教育庁学校教育課の中村裕文先生は次のように語る。

「生徒の多様化に対応し、生徒が中心になって活動するという視点で高校の教育を再検討しようという思いは、早くから県としても抱いていました。そんなとき、県内のある高校が大学教授や企業のトップ、PTAの代表など、学外の方々を迎えて『学校活性化懇話

会』という組織を作ったのです。懇話会では、日々の学習内容、進路指導、部活動などさまざまなテーマについて、学校の将来像はどうあるべきか、議論が重ねられました。そして、実際に提言された方策に基づき、例えば生徒の志望に応じたコース作りなど、具体的な学校改革が行われたのです。我々はこの高校の取り組みを、1校だけのもので終わらせないために、五つの高校を対象にした『学校活性化推進事業』を立ち上げたのです」

特色を作っていくか、各校で検討が始まった。そしてこの事業でも、プレーンとなる推進委員会は学外の人を交えて結成された。メンバーにマスコミ関係者や市長を迎える高校もあり、まさに学校独自の人選が行われたようだ。「各校では年に数回、メンバーを集めて、学校作りの方針を検討します。高校によって生徒の状況は違いますが、その学校ならではの方針が打ち出されるように期待していました」

各校が作成した3年間に渡る事業計画を見ると、特色作りの観点は、国際化の進展に対応した教育体制作り、地域社会と密着した教育活動の推進

社会の変化に対応した教育活動の推進、教育課程、教育内容、指導方法などの工夫と改善の四つに分類できる。「ほかの学校にない、その学校独自の個性を見いだすためにはどんな活動がふさわしいか、各高校で委員の方々と交えて検討していただきました。例えば、国際化をテーマに掲げた高校の活動内容は、佐賀大の留学生との交流や、郷土の歴史、風習を外国人へ紹介するなど。また、地域との密着をテーマにした高校は、自分たちが通学に利用する無人駅の清掃からスタートし、今では地域の人々と共同してボランティア活動に取り組むまでに発展しまし

た。その高校では、『その他科目』として『ポランティア』という授業をオリジナルの教科書を作って行っています」そのほか、地域の特性を生かした体験学習を行うのと同時に、企業の研究所を訪問するなど、積極的に実社会の動向に触れる取り組みも行われている。「高校を取り巻く環境を踏まえての活動が多いです。地域社会をよく知って、地域社会に貢献できる人材を育てることも高校の役目ですからね」

中学校と 連携した指導を

高校の特色化は、地域の人々にもその学校の個性として理解され始めたのでは……と、中村先生は感じている。「特に中学生とその保護者に対しては、これらの各高校の取り組みの様子を伝えていかなければなりません。高

校には進学という側面だけでなく、幅広い学校活動があることを理解していただき、『あの高校でこんな活動をした』という気持ちで高校を選んでもらいたいのです」

佐賀県では県内を五つの地区に分け、それぞれの学区内の幼稚園から高校までの活動内容を紹介する「教育フェスタ」というイベントがある。変わり始めた高校の姿を知ってもらうため、各高校はこの教育フェスタで学校紹介を行う。また高校によっては独自に学校案内を作成し、公民館など地域の人々の目に触れる場所に配置している。

「教育フェスタは保護者の注目度も高く、参加者も多いんですよ。今までわからなかった高校のことがよくわかった」という声もいただいています。実際、これまで高校のことといえば、どの大学に何人合格したということくらいしか、学外には伝わっていません

この事業に参加した五つの高校でも先例に倣い、学外から識者を委員に招いた「活性化推進委員会」が設置された。先述のある高校の取り組みは、県全体の教育改革の展望にマッチし、さらにはほかの高校に刺激を与えるものだったと中村先生は振り返る。

「学外の方が参加することで、教師以外の視点で学校にながら必要かを議論することができました。教師も自分自身が置かれている立場、そして今後なにをしなければいけないのかを客観的に見ることでできたのです」

そして8年度より、県内すべての普通科高校を対象にした3か年計画「特色ある普通科高校づくり推進事業」が始まったのである。

それぞれの学校を 個性化する

生徒が中心となって活動する学校作り、生徒を生き生きとさせる学校作りのため、それぞれの高校がどのような

でした。それぞれの学校でどんな取り組みが行われているのか、もっと伝えていきたいですね」

学校改革にあたって学外の意見を取り入れ、その成果を広く地域に伝えていく。佐賀県の教育改革の根底には、開かれた学校作りという発想がある。「昨年度からは、進路指導における中・高連携をいかに図るかを、中学校高校の校長や進路指導主事が集まって、検討を始めました。例えば、職場訪問を題材にしてどのような啓発的な体験学習を行えるか検討するといったように、具体的に中学校と高校が協力して進路指導を考えていく場が作られたのです。将来的にはここにも地域の方々を招き、意見を聞いていきたいです」

佐賀県の普通科高校の特色化の取り組みは、今ようやく芽が出始めたところと中村先生は語る。

「今後の課題は、『総合的な学習の時間』をどうするかです。この新しい授業は、各学校の特色を生かし、各教科活動を通して得たものを総合化しながら、生徒たちに一番必要なことを教えていく時間です。学校が独自に作り上げる意味で、これまでの取り組みと連動するはずですから、今行っている活動と重ね合わせて、計画と指導方法を高校とともに考えていきたいですね」



佐賀県教育庁学校教育課指導主事
中村裕文 Nakamura Hirotami

武雄高校などで生物の教師として20年間教壇に立つ。同校では進路指導副主事を務める。平成6年度教育庁に赴任。へき地の生徒に通学費を補助する事業などに取り組む。佐賀県の高校生について「純粋で素直、もっと積極的にいろいろな活動に取り組んでもらいたい」と感じている。

唐津東高校では「特色ある普通料高校づくり推進事業」の一環として、将来リーダーとして活躍する人材の育成をめざし、さまざまな行事を実施している。同校の取り組みを研修部の荒谷博幸先生に伺った。

体験の場を数多く用意

唐津東高校の特色作りのキャッチフレーズは「地域社会・国・世界のリーダー養成をめざして」。推進委員会のメンバーに九州大・福岡大の教授、地元の特門学校や中学校の校長、PTA会長などを迎え、特色作りの方針と具体的な取り組みについて検討してきた。

「委員の方々からも、これからの高校は座学偏重ではいけないという意見が出され、実際に生徒の進路意識を高める多くの取り組みを準備しました」

今年度の取り組みは、職場訪問、大学訪問、社会人講師や大学教授による講演会、さらに地元中学校の生徒会との交流



各都道府県が
取り組む
教育改革

佐賀県

事例紹介

佐賀県立唐津東高校

生徒の自主性を育む 多彩な行事を実施

ボランティア活動など実に多彩である。

「学外の委員から提案してもらった行事として、九州大訪問が挙げられます。

これは推進委員長であり、本校のOBでもある九州大の教授にお世話していただき、本校だけで実施したものです。地域の文化遺産に関する調査研究、社会人との交流も委員からの提案です。また、委員より『高校生に対して授業を行ってみ

たい』という申し出もありました」

最近の生徒は、体験からなにかを学ぶとることが少ないと語る荒谷先生。学校独自の行事を充実させる一方、財団法人などが主催する海外研修への応募を生徒に呼びかけるなど、学外で実施される体験学習の場を積極的に利用するよう、進路指導部と研修部が生徒に対して情報提供を行っている。

「授業以外のさまざまな体験も重要だと、教師の意識が変わってきたのです。委員の方からは、将来のリーダー養成のためには、もっと英語圏の文化に触れる機会が必要といった新たな提言もいただいています。生徒が自分の目標を見つけ出せるような行事を、さらに委員

会の協力を得ながら検討し、実現していきたいと思えます」

生徒主体の 行事を運営

数々の行事が行われる同校では、生徒の参加意識を高めるため、行事は生徒主導のスタンスで臨んでいる。

「生徒の発表会などの司会進行は生徒主体で、教師はあくまで助言者です。日常の教育活動の中で『当事者意識』を育みます。自ら動かない生徒に『なぜやらない?』と問い詰めるのではなく、自ら動く生徒を増やす指導に努めています。1人でも多くの生徒が自ら動き始めるような機会を作っておくのが教師の役割といえます」

同校では1、2年生の生徒を中心に、それぞれの経験を体験談としてまとめるように指導しているが、そこでも評価は生徒同士で行う。教師は相互評価のためのポイントを提示するだけだといふ。多彩な行事への生徒の主体的参加を重視する同校の指導スタイルは、まさに、リーダー養成の視点に立ったものといえるだろう。

「今後は、体験を内省する場として小論文指導を充実させたいと思っています。今は教師、生徒ともいろいろな試みをする段階といえますね」



佐賀県立唐津東高校
荒谷博幸
Arami Hiroaki

唐津東高校は来年、創立100周年を迎える伝統校。荒谷先生は2年前に同校に赴任、数学科担当の先生たちが今最も力を入れているのは小論文指導。体験を内省し、他者に見せることで、刺激し合える作業。だから生徒にはいろいろなことを、もっと積極的に体験してもらいたいのです。